

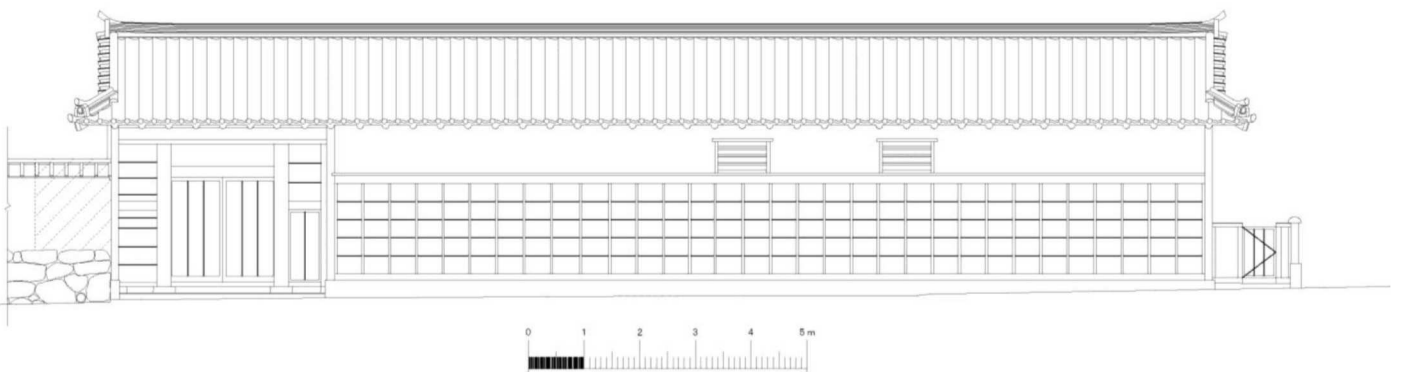
旧池田屋敷長屋門

旧池田屋敷長屋門は、彦根城の中堀に近い第三郭に建っています。かつて、池田屋敷のあった尾末町一帯には、中級武家屋敷（50～1000石）が広がっていました。

池田屋敷に住んだ池田太右衛門家は、江戸時代初期（慶長15～16年：1610～11）に2代当主井伊直孝により「伊賀者」として召抱えられました。初代と2代は100石取りでしたが、3代は250石に加増、4代は150石に減知、7代に180石となり、以後代々180石を相続して明治維新を迎えています。拝領屋敷は、当初は御歩町（現在の京町2丁目）にありましたが、江戸時代中期以降は、現在の尾末町に移りました。

かつての屋敷地は、間口17間余（約34m）、奥行10間（約20m）ありましたが、現在は主屋などすべてが取り壊され、長屋門のみ現存しています。長屋門は、桁行10間（約20m）、梁間2間（約4m）の入母屋造りで、正面左端に門が設けられ、門の右手には「中間（武家奉公人）部屋」や「馬屋」などの長屋が5室連なっています。

彦根藩では分限（身分）に応じて長屋門の格式が定められていたようですが、この建物は彦根藩の中級武家屋敷の典型をなす長屋門として貴重であり、昭和48年（1973）に彦根市の指定文化財としました。なお、この長屋門は、平成21年度から3年を費やして、歴史まちづくり事業の補助により全解体修理を実施いたしております。

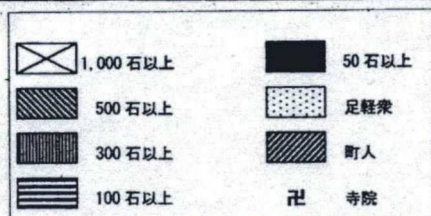
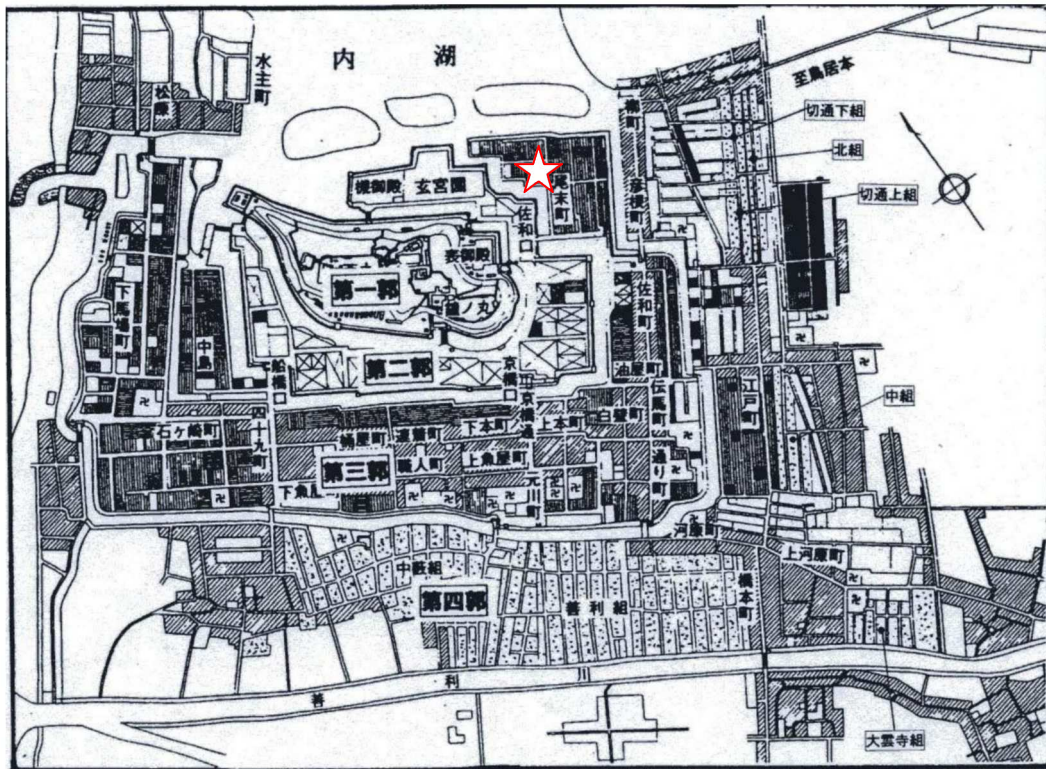


彦根の城下町

彦根の城下町は、大規模な土木工事によって計画的に造られた町です。計画当初、城下は多くの^{ひら}刈や沼のある湿潤な土地が広がっていました。そのため、松原内湖に注いでいた^{せり}芹川（善利川）を約2kmにわたって付け替えて一帯の排水を良くし、琵琶湖に直流させました。また、現在の^{おすえ}尾末町にあった尾末山を全山切り崩して、周辺の低地を埋め立てたと伝えています。こうした大土木工事により、城下町の計画的な地割が可能となったのです。

完成した彦根の城下町は、3重の堀によって4つに区画されていました。内堀の内側の第一^{かく}郭は、天守を中心として各^{やぐら}櫓に囲まれた丘陵部分と藩庁である^{おちてくてん}表御殿（現在の彦根城博物館）などからなっています。内堀と中堀に囲まれた第二郭は、藩主の下屋敷である^{けやき}槻御殿（現在の^{げんきゅう}玄宮園・楽々園）と家老など千石以上の重臣の邸宅が広がっていました。中堀と外堀の間の第三郭は「^{うちまち}内町」と称し、武家屋敷と町人、また外堀の外側である「^{とまち}外町」には町人の住居と足軽の組屋敷がありました。内町・外町ともに武士・町人あわせて居住していますが、居住地は明確に区分されており、^{あぶらやまち}油屋町・^{うおやまち}魚屋町・^{おげやまち}桶屋町・職人町など職業による分化配置が見られました。築城当初、特定の職能集団が集住させられた結果でしょう。

城郭とともに、こうした城下町の姿を良く残しているのも、彦根の大きな特色です。



★ は旧池田屋敷長屋門の位置